論　説

ジェーン・オースティン『説得』（1818）試論：自己への説得

ブラウン馬本　鈴子

＜要　旨＞

この試論では、ジェーン・オースティンの晩年の完成小説である『説得』(1818)の女主人公アン・エリオットの自己成長を、愛するウェントワースとの婚約を解消してしまった反省の心境から、婚約解消の正当性を認識するまでの、自己への説得のプロセスだと踏まえ、その過程を分析する。また、自分の幸せを強引に追求してゆくことには消極的であった女主人公が、再びウェントワースの愛情を得るために積極的に行動していく様子も自己成長の証として明示していく。最後に、小説のタイトルが示唆する〈説得〉とは、一体何を意味しているのかに言及する。

キーワード：ジェーン・オースティン、説得、アン・エリオット、自己成長、英文学

1．はじめに

オースティンの最後の完成した小説である『説得』[1]は、作家が晩年にアジソン病と闘いながら書いた作品で、死後に発表された。有名な『プライドと偏見』[2]や『エマ』[3]といったユーモラスで軽快な小説と比べると、哀愁さえ感じる静かな雰囲気の作品である。『説得』の主人公アン・エリオットと比べ、以前のオースティン小説の女主人公たちはずっと若く、自身の知性や美貌、そして判断力を自負する自信過剰といっても過言ではない女性たちであった。例えば、『プライドと偏見』のエリザベス・ベネットは21歳。経済的苦境への不安も全く感じさせることなく、自分の知性や判断力を過信するあまりに、善良なダーシーに偏見を抱き、彼を毛嫌いするが、誤解が解けて少し反省すると、そのご褒美に最後には資産も階級もベネット家よりは数段立派な、ダーシーとめでたく結婚する。一方、『説得』のアンは29歳。娘盛りの活気と美しさは失せ、父親曰く「やつれ」気味である。父親はアンが結婚することにもはや一抹の期待も抱いてはいない。彼女は美しかった８年前の1806年、兄の家に身を寄せていた当時23歳のウェントワース中佐と恋に落ちて婚約するが、彼の経済的不安定さを良しとしない周囲の反対に逆らうことが出来ず、婚約を解消してしまう。小説『説得』の冒頭では、負債に追われるエリオット家が先祖代々住んできたケリンチ屋敷を借家に出すことが決まり、テナントとしてクロフト提督夫妻が申し出る。そこで、クロフト夫人の弟であるウェントワースとの思い出から、婚約解消を後悔する傷心のアンが登場する。自信に満ちたかつての女主人公たちが、恋愛を通して自身の振る舞いや冷静な判断力の欠如を反省し、自己成長を遂げる小説のパターンがオースティン小説の特徴であるとすれば、『説得』のアン・エリオットは、作品の冒頭ですでに反省しており、胸の内はウェントワースとの婚約を解消した後悔で一杯である。ウォルトン・リッツの言葉で言うなら、「他の作品が終わったところから始っている」[4]のだ。しかも反省の原因も自負や傲慢さといった独りよがりの愚行というよりは、ウェントワースとの結婚に反対する周囲の説得を受け入れた自分の冷静さにある。すなわち「アンは青春時代に思慮分別を強いられ、年を取るにつれてロマンスを学んだ」(51)のである。

この試論では、『説得』の主人公アン・エリオットの自己成長を、婚約を解消してしまった反省の心境か

西南女学院大学人文学部英語学科　講師

ら、婚約解消の正当性を認識するまでの、自己への説得のプロセスだと踏まえ、その過程を分析する。また、自分の幸せを強引に追求してゆくことには消極的であった女主人公が、再びウェントワースの愛情を得るために積極的に行動していく様子も自己成長の証として挙げていく。

２．婚約解消と誤解

Oxford Dictionary of English は「説得する」(persuade) の定義の一つ目として、「[with obj. and infinitive] induce (someone) to do something through reasoning or argument」[5] としている。人は、さまざまな動機によって、他者を自分の思い通りに行動させるために、筋道を立てて説明して、説得を行う。小説『説得』でも、題名が示唆するように、物語の中で登場人物たちは色々な事情や思惑から、些細なことから重要なことまで説得を通して干渉し合う。例えば､最初に〈説得〉という言葉が出てくるのは、贅沢三昧の生活がたたり、多額の負債を抱え財政困難に陥ったエリオット家を救済すべく、一家の友人であるラッセル夫人が、節約計画書をアンと作成する場面である。アンの父親であるサー・ウォルターが計画書に納得するかどうかについて、ラッセル夫人は、「（省略）きっとお父様を説得できると思うわ。私たちふたりで真剣に固い決意をもって説得しなくてはいけません」とアンに言う。虚栄心の強いサー・ウォルターが、ラッセル夫人とアンの提案した質素な生活に耐えることができるはずもなく、計画書はすぐに却下される。しかし代理人弁護士のシェパード氏と彼の出戻り娘であるクレイ夫人の巧みな手回しと、話の進め方によって、サー･ウォルターはケリンチ屋敷を借家にして、自分たちはバースに移り住むことにあっさりと同意するのであった。サー・ウォルターのような虚栄心の強い頑固な人間には、誠心誠意がこもった厳しい「説得」よりも、虚栄心をくすぐりつつ巧みな言葉遣いで心理を操作する方が有効であるという皮肉がここで示されている。

しかし､ラッセル夫人の誠心誠意がこもった説得は、８年前の婚約破棄に関してアンには有効であった。母であるエリオット夫人は、アンが14歳の時に亡くなっており、アンの名付け親でもあるラッセル夫人は、アンにとっては母親的存在であった。当時一介の海軍軍人にすぎなかったウェントワースは、財産もなく、将来金持ちになれるという自信の根拠は、彼の情熱と活力に過ぎなかった。そこでラッセル夫人は、19歳という若さでアンの一生を台無にさせてはならぬと、アンに結婚をあきらめるよう説得したのであった。

> アンはまだ若くておとなしい性格だが、父の意地の悪い無言の反対には逆らうことができたかもしれない。姉からもやさしい言葉やまなざしは一切なかったけれど、なんとか逆らうことができたかもしれない。しかし、自分があんなに愛しかつ信頼しているラッセル夫人から、あのような首尾一貫した反対意見を、あのようなやさしい態度で何度も言われると、アンはとても逆らうことはできなかった。この婚約は無分別で不適切で、成功する見込みもないし、成功しなくて当然の間違った婚約だと、だんだんほんとうにそう思うようになった。しかしアンは、自分のことだけを思ってこの婚約を解消したわけではなかった。自分のことよりも相手のためを思って婚約解消するのだという気持ちがなかったら、とうていウェントワースをあきらめることはできなかっただろう。自分は何よりも「あの方」のためを思って慎重に振る舞い、自分を抑えているのだと信じることが、最後の別れの悲しみに対する一番大きな慰めだった。(47)

アンが本当に「自分のことだけを思って」行動したならば､「無分別で不適正で、成功する見込みもない」というラッセル夫人の理性的な判断よりも、愛する男性を信じて結婚したいという若い女性のロマンチシズムが勝ったであろう。しかし、ウェントワースの実力と運を信じて婚約したとしても、戦争で活躍するという運に実際に恵まれなければ永遠に結婚はできず、結果的にウェントワースが辛い思いをすることになる。そこで、アンは、自分の感情を犠牲にして、理性的に振る舞ったのである。従って上の引用は、名付け親に対して従順で、かつ恋人に対しても思いやりがあるアンの性格がよく表現されている。しかしながら、婚約解消というアンの決断は、義理の娘の役割としての義務感の強さや、恋人への私欲を超越した深い愛情がなした決断であったとも言える一方、振られたウェントワースからしてみれば、アンの意志の弱さや、家柄へのプライドの表れであったと理解されてもおかしくない。事実、8年後に再会したウェントワースは、アンに対する怒りをまだ忘れていない。彼の態度はよそよそしく冷淡であった。アンの妹メアリーは、ウェント

ワースがアンのことを「すっかり変わってしまった」と言っていた、とお節介にもアンに報告して姉を傷つけるのであった。ウェントワースとの再会で、彼への思いが８年という歳月を経てもなくならなかったことを思い知らされたアンは、次のように考え直す。

> 「すっかり変ってしまって、つい気がつきませんでした！」この残酷な言葉は、アンの脳裏にこびりついて離れなかった。でもアンは、この言葉を聞いて良かったとすぐに思った。この言葉は、私の頭を冷やしてくれる効果はありそうだ。興奮を静め、気持ちを落ち着かせ、結局は私を幸せにしてくれるにちがいない。(102)

理性で愛情を封印するのが無理であると悟った今、今後の恋愛は決して成就しないと思い込むことで、ウェントワースをあきらめようとするアンの苦悩が見受けられる場面である。ジョン・ハーディーは、アンの置かれた立場を「感情を内奥に秘めておくことを強いられており、ぎこちなさを回避するだけでなく、更に傷つくことから自分を守る為に、ものすごい自己抑制を実践する必要がある」[6]と分析する。

一方、ウェントワースは、自分のアンに対する恋心は「すでにすっかり消え去って」(103) いると思い込んでいる。８年前にアンとの婚約が解消された後も、「アンに匹敵するような女性と出会ったことはなかった」(103) と認めてはいるが。彼は、適当な相手が見つかればすぐにでも結婚するつもりでいた。適当な相手とは、「意思が強くて、気だてのやさしい人」(104) である。しかし小説の仕掛けとしては、ウェントワースがアンと正反対の女性を理想の結婚相手に掲げれば掲げるほど、ウェントワースが無意識のうちにも、アンを忘れられずにいることを読者に印象付ける仕組みとなっている。万能の語り手は、ウェントワースがアンとの過去の恋愛をどのように解釈していたかについて以下のように記している。

> ウェントワース大佐はアン・エリオットを許してはいなかった。アンは彼にひどい仕打ちをしたのだ。彼を見捨て、彼を裏切ったのだ。さらに悪いことに、その行為によって、アンの性格の弱さが暴露されたのであり、そういう弱さは、決断力と自信にあふれたウェントワース大佐には我慢できないものだった。アンは、家族や友人たちの願いを入れるために彼を見捨てたのだ。強引に説得されて彼を見捨てたのだ。それはまさに、弱さと臆病さ以外の何者でもないのだ。(103)

このような２人がどのような経緯で再び相愛となり、結婚するのか。そのヒントは、上に挙げたアンとウェントワースの心境に隠されている。恋をしたら周囲が見えなくなりひたすら自分の世界に入ってしまう『分別と多感』のマリアンヌが感情に生きるヒロインだとすれば、アンは上に挙げたハーディーの分析にもあるように感情を抑えるヒロインである。婚約者を失った悲しみに酔いしれるかのように、失恋や不幸に打ちひしがれた心を詠う詩を読むことについて、「強い感情だけが、詩の本当の素晴らしさを理解できるのであり、強い感情だからこそ、節度をもって詩を味わうことが大切なのではないでしょうか」(168) とアンは言っている。アンの理性や義務感や、恋人への配慮は、一時的で独りよがりな恋愛感情よりも強く、彼女は恋愛感情を超越した偉大な愛情の持ち主であると言っていい。

ウェントワースは、周囲の説得によって自分との婚約をあきらめてしまったアンの行為から、アンの性格の弱さを非難している。アンの真の性格を知るためには、彼女が婚約を解消した本当の理由が、エゴや、性格の弱さからではなく、ウェントワースを思いやっての理由であったことを学ばなくてはならない。また、ウェントワースは、アンが婚約を解消した理由を、ラッセル夫人のような第三者の理性的な立場になって理解する寛容さを身につけなければならない。すなわち、婚約解消という悲劇をもたらしたが、アンの性格の懐の深さを物語る理性的な決断力のすばらしさに気づかなければならないのだ。一方、ウェントワースの愛情を取り戻すために、アンは、自分の思いを、勇気をだして伝える行動力を身につけなければならない。

３．再　会

クロフト家とマスグローブ家の親密な交際を通して、アンとウェントワースが同席する機会が増えてくる。ウェントワースはアンに対して、他人行儀で冷たい態度をとるが、ふとした瞬間に、散歩で疲れた様子のアンを馬車に乗せたり、背中によじ上ってアンを困らせる甥っ子をアンから引き離したりと、アンへの思いやりを示す。更に、ウェントワースは、ルイーザ（メアリーの夫の妹）から、アンが婚約解消の３年後に裕

福なチャールズ・マスグローブ（メアリーの夫）の結婚の申し出を断ったことを聞く。しかし、アンとウェントワースの関係が劇的に改善されることはなかった。というのも、２人の関係が改善するよりも、ずっと速い速度でウェントワースとルイーザの親密さが増していくからである。ルイーザとは、エクスターの学校で普通の教養を身につけ、まあまあの顔立ちの明るくて、気だてが良い20歳の娘である。

更に、優柔不断なところがなく断固としたルイーザの性格に、ウェントワースは惹かれているのでは、とアンは感じていた。例えば、ウェントワースの姉夫婦の仲の良さと、二輪馬車のドライブの危険性の話題から、ルイーザは、ウェントワースに「あなたのお姉様がクロフト堤督を愛しているように、私が誰かを愛したら、私はいつもその方と一緒にいたいわ。どんなことがあっても離れたくないわ。他の人に安全に運転してもらうより、その方にひっくり返されたほうがいいわ」（141 − 42）と熱っぽく語る。＜愛する人が運転する危険な二輪馬車＞はもちろん＜ウェントワースの船＞のメタファーであり、経済的に不安定な人生という海原への航海のシンボルとなっている。また、メアリーの干渉にも負けず、自分が妹のヘンリエッタと恋人の仲を取り持った話から、「私は自分で決めたことは、そしてそれが正しいと思ったことは、何が何でもそうするわ。あんなに偉そうに何か言われたくらいで、尻込みしたりしないわ。いいえ、誰が何と言っても自分の思った通りにするわ。あんなに簡単に人の言うなりになるなんて信じられない！私は一度決心したら絶対にそうするわ。」(145)とウェントワースに断言する。これを聞いたウェントワースは、ルイーザの決断力と意思の強さを賞賛し、「ぼくのまわりのすべての人たちに第一に望むことは、気持ちをぐらつかせず、強い意志を持つことです。」(147) とまじめな調子でルイーザに語りかけるのであった。ルイーザの発言から、ウェントワースが、危険を顧みないルイーザならば怯むこともなかった海軍中佐という自分の不安定な身分が原因で、かつての恋人であったアンが、ラッセル夫人の説得を享受して婚約を破棄してしまったことに思いを巡らせていたことは言うまでもないであろう。

しかし、ウェントワースが絶賛したルイーザの決断力と意思の強さは、皮肉にも、むこうみずな情熱の愚かさと、理性的な決断力の大切さをウェントワースに気づかせてくれることとなった。ウェントワースについて行く形で、チャールズ、メアリー、ヘンリエッタ、ルイーザ、そしてアンは、ライム・リージスに行く。ライムの有名なコッブ(突堤)を散歩中、悲劇は起きる。

> 風が強すぎて、新しく出来た突堤（コッブ）の高い部分は、女性たちにはあまり快適ではなかった。そこで石段を下りて、突堤の低い部分を散歩しようということになり、みんなは急な石段をゆっくりと慎重に下りていった。ところがルイーザは、石段を下りるなんてつまらないから、自分は上から飛び降りて、下にいるウェントワース大佐に受けとめてもらうのだと言って聞かなかった。（省略）でもここは、下が柔らかい地面ではなくて固い石畳なので、ルイーザの足への衝撃が心配で、ウェントワース大佐はあまり気が進まなかったが、仕方なく承知した。ルイーザは無事に飛び降りた。するとルイーザは、飛び降りる楽しさをみんなに示そうと、もう一度飛び降りるためにすぐに石段を駆けのぼった。ウェントワースは、やはりルイーザの足への衝撃が心配なので、やめたほうがいいと言った。しかし、大佐がいくら忠告しても無駄だった。ルイーザはにっこり笑って、「いいえ、私は絶対に飛び降りるわ」と言った。大佐は仕方なく両手を差し出した。――が、ルイーザが飛び降りるのが一瞬早すぎた。ルイーザは固い石畳に落ちて倒れ、すぐに抱き起こされたが、なんと気を失っていた！（181 − 182）

パニックになる一行の中で、一番冷静に振る舞ったのは、アンであった。アンの指示で一行は窮地を切り抜け、ルイーザは一命を取り留めた。ウェントワースもアンの指示や判断に頼るようになり、アンは感激する。ルイーザが飛び降りるのを止めることが出来なかったことで自己嫌悪に陥るウェントワースの言葉を聞いて、アンは思う。

> 大佐は以前ルイーザに向かって、「幸せになりたいと思ったら、強い意志を持たなくてはなりません」と言い、断固たる性格こそ幸せをつかむ道だと言ったけれど、彼はいま、その意見が正しいかどうか疑問に思ったのではないだろうか。人間のすべての性質と同じように、断固たる性格といえども、釣り合いと限度が必要だと思ったのではないだろうか。他人の意見に従う性格も、断固たる性格と同じように、ときには幸せをつかむことがあるかもしれないと思ったのではないだろうか。（193 − 194）

ここでアンは、ウェントワースが過去の婚約破棄で彼女が下した決断に対して、新たな目で見てくれたらと願い、また自らも後悔した過去の決断の慎重さに少しは肯定的な見方ができるようになったのではないだろうか。

4．変　化

また、ライムの旅は、アンの外見に功を奏した。ライムでの二日目の朝に散歩に出かけた際、通りすがりのひとりの上品な紳士が、賞嘆のまなざしでアンを真剣に見つめた。実はこの紳士こそ、サー・エリオットの死後に準男爵の爵位とケリンチ屋敷を引き継ぐことになっているアンにとってはいとこにあたるエリオット氏であることが後でわかる。

> アンはそのときとても健康そうに見えた。さわやかな潮風に吹かれたおかげで、頬の色つやが増し、目も生き生きと輝き、目鼻立ちの整った美しい顔が、若々しい輝きと生気を取り戻していた。その紳士――態度は完璧な紳士だった――がアンの美しさに見とれたことは明らかだった。ウェントワース大佐もすぐにアンのほうを振り返った。大佐もそのことに気がついたのだ。大佐は一瞬アンの顔を見つめたが、一瞬きらっと光った大佐の目は、こう言っているようだった。「あの紳士はきみの美しさに見とれていたよ。いや、ぼくだって、いまこの瞬間、あのアン・エリオットが蘇ったかと思ったよ」(173)

事実、エリオット氏が賞賛のまなざしを向けたことが、ウェントワースの「目を覚まさせ」(401) た、と最後に明かされる。アンの外見が美しく戻ったことは、のちに会った、ラッセル夫人やサー・ウォルターからも指摘される。平凡な少女の顔立ちから娘の花盛りを迎えて初めて美しくなる『マンスフィールド・パーク』[7]のファニーや『ノーサンガーアビー』[8]のキャサリンを除き、健康にも美貌にもはじめから恵まれた状態で登場する他のオースティン小説の女主人公とは対照的に、27歳のアン・エリオットは、ライムの潮風によって美しさを再生するのだ。今まで人びとの目に留まらなかった「やつれ」気味の女性が、外見の美しさを取り戻したことと平行して、アンは脚光をあびるようになってくる。ジョン・ウィルトシャーは、「この小説は、端にいた傍観者が次第により中心的な存在となってくるように形作られている。クライマックスの場面では、彼女は部屋の中で中心人物となっている。これは、アンの内的生活（イナー・ライフ）が彼女を取り巻く外的生活（アウター・ライフ）と徐々に触れ合い、働きかけていく様子と平行している。」[9]と指摘する。

ところでアンと海との相性の良さは、美貌復活への効果だけには留まらない。ライムでアンは、マスグローブ家の人たちと一緒に、ハーヴィル夫妻によって厚くもてなされる。アンは〈陸〉の代表である上流階級の実家で実践される形式的で心のない社交界のあり方と比較して、〈海〉の代表である海軍仲間たちの暖かさや懐の深さに憧れずにはおれない。

> ギブ・アンド・テイクの義務的な招待や、見せびらかしのための形式的なディナーなどとはまったく違ったハーヴィル大佐の歓待精神は、思わず見とれてしまうほど魅力的だった。だがそれゆえにアンは、ウェントワース大佐の将校仲間とこれ以上親しくなると、自分の気持ちがますますつらくなるのではないかと思った。「こんなすばらしい人たちが、私のお友達になっていたかもしれないのだ」と思うとアンは、ますます沈んでゆく気持ちと戦わなくてはならなかった。(164－65)

更に、準男爵の価値を象徴するケリンチ屋敷に関しても、海軍のクロフト提督夫妻の方がふさわしい持ち主であることを確信する。

> (略) アンは、クロフト提督夫妻をとても立派な人たちだと思っており、ケリンチ屋敷は素晴らしい借り手に恵まれてほんとうに幸運だと思っていたからだ。クロフト提督夫妻は、教区民たちの立派なお手本となり、貧しい人たちに最高の親切と援助の手を差し伸べてくれることだろう。だからアンは、正直なところこう思わずにはいられなかった。エリオット家がケリンチ屋敷を去ることになったということは、とても残念で恥ずかしいことだけれど、結局は、住む資格のない一家が去り、持ち主より立派な人たちの手に渡ったのだ、と。(203－4)

18世紀の終わりごろから、フランスの市民革命、ナポレオン戦争を経て、封建的な階級制度は崩壊しつつあった。そこでサー・ウォルターのように、負債を

抱え何世代も維持してきた屋敷を手放す上流階級の者もいる一方、クロフト提督やウェントワース大佐のように、戦争で財産を作り、上流階級の仲間入りを果たす軍人が台頭してきた。こうした軍人はイギリス国民を守ったとして、立ち居振る舞いにおいても紳士として尊敬を受けた。もちろん、『高慢と偏見』に登場する義勇軍連隊のウィッカム中尉のように、紳士の仮面を身につけながら、不道徳極まりない悪党も存在するが、オースティンの兄弟であるフランシスとチャールズも海軍軍人であり、アンが海軍将校たちに抱く尊敬とあこがれは、作者の心理を反映しているのかもしれない。モナ・スシューマンは、『説得』が「オースティン小説の中では初めて、昔の財産、或いは不動産に由来する財産が、稼ぎで得た財産よりも高い価値を持たない」[10]と指摘する。更に、マルコム・ブラッドベリー[11]は、土地の管理が社会的・道徳的義務である地主階級が、今やエリオット家ではなくクロフト家に引き継がれたことが、小説が読者に〈説得〉しようとしていることの一つであると指摘している。

しかしここで重要なのは、アンの海軍への思い入れが、封建的な自分の家族が抱いている階級意識からの脱却であり、アンの自己成長の表れでもある、という点であると思う。のちの場面でも、アンは父や姉がこぞって関係を深めようとする高貴な親戚ダルリンプル子爵夫人と令嬢との交友より、旧友で今は貧しい生活を送る障害者であり、未亡人でもあるスミス夫人との交際を温めるようになるのだ。

5．和　解

アンとウェントワースの恋愛が成就する最終舞台はバースである。ライムでアンを一目見て恋に落ちたいとこのエリオット氏は、アンに「あなたのエリオットと言う苗字が、ずっと変わらないでほしいと願っているのです」(309) と、プロポーズの言葉をほのめかす。エリオット氏のアンへの愛情が誠実であったかどうかはさておき、エリオット氏が、アンの家族に急接近した本当の理由は、以下の通りである。彼は、準男爵という地位の価値をかつては軽蔑していたが、最近になって重要視するようになった。そんな中、サー・ウォルターが身分の低いクレイ夫人と再婚するかもしれないと言ううわさをきいた。そしてクレイ夫人が男の嫡子を生んでは自分に爵位が回ってこないことを危惧して、クレイ夫人の目論見を邪魔する為にバースにやってきたのであった。ラッセル夫人が、アンとエリオット氏の結婚を期待する一方、アンは初めから、例え相愛にならなくても愛する男性はウェントワース大佐ただ一人であると悟っていたし、エリオット氏の過去の生活態度と道徳観に不信感を抱いていた。ちなみに、オースティンは、姪(兄エドワードの長女ファニー)に宛てて次のような恋愛アドバイスを手紙で送っている。

> 彼の地位、家族、交友関係、そして何よりも彼の人格――稀に見るよい性格、節操、公正な考え、よい生活習慣――こういったことすべてをあなたは評価できるでしょう。これら全部が本当は一番大事なのです。[12]

放蕩、不摂生、不道徳を連想させるリージェンシーの時代が舞台であるとはいえ、エリオット氏が、極めて身分が低くて裕福な女性とお金目当てに結婚したことや、かつてはエリオット家の期待を裏切り、交際を退けてきたことをアンは見逃さなかった。かつてウェントワースを危険人物だと思い込み、今はエリオット氏を大絶賛するラッセル夫人に、人物の本性を見抜く目がなかったことを強調する伏線ともなっている。

ルイーザが怪我をしたので、紳士であるウェントワース大佐は責任を取ってルイーザと結婚をするにちがいない。あきらめていたアンに、朗報が舞い降りる。ハーヴィル家で療養中のルイーザが、同じくハーヴィル家に滞在中のベニック大佐と婚約したと言うのである。かつて、ベニック大佐は、ハーヴィル大佐の妹と婚約していたのだが、彼の婚約者はこの前の夏に亡くなっていた。ルイーザとベニック大佐の婚約は、ウェントワース大佐にとっても吉報であった。彼は、世間からは失恋したと思われていたが、実はルイーザから解放されて喜んでいた。なぜなら、ルイーザに恋をしていたわけではないし、ルイーザの事故を通して、アン・エリオットのすばらしさを再認識したからであった。しかし周囲からはルイーザと相思相愛だと見られていた。ルイーザが転落するのを受け止めそこなった自分が責任を取って彼女と結婚しなければいけないということは、愛していない女性と結婚しなければならないことであり、何よりも残念なことには、本当に愛する女性アンをあきらめなければいけないということであった。自由の身となった今、ウェントワースのすべての幸せはアンに委ねられていた。しかし、アンを追ってバースにやってきたウェントワースが目にした

のは、エリオット氏と親密な様子のアンの姿であった。

ウェントワースの誤解をといて、女性でありながらウェントワースに愛情を伝えなければならないのはアンの役割となった。音楽会にはウェントワースが顔を出しそうなので、旧友のスミス夫人との約束を丁重に断り、機会があれば絶対にウェントワースに話しかけようとアンは勇気を奮い立たせる。植松みどりは、アンの行動力を次のように分析する。

> 過去の経験――心ならずも愛する人を拒絶し、失ってしまった苦しみ、悲しみ、その後の傍観者としてしか存在できない辛さ、寂しさ――は、アンに自分の信ずる意志に従って行動する必要性、重要性を思い知らせたことであろう。（略）相手の嫌悪という最大の障害が取り除かれた今、彼女は、自分の心を行動として表現しようとしているのだ。この精神と行動の一致こそが『説得』の女主人公が、独立した真実の生を送っている証拠である。[13]

実際に、演奏会場にウェントワースが入ってきたとき、アンは後方に彼を軽蔑するサー・ウォルターとエリザベスがいることにもめげず、さっと進み出て声をかける。父と姉の顔を見ないで済むから、「自分が正しいと思ったことを実行できそうな気がした」(298)のだ。また、休憩時間には、ウェントワースから話しかけられやすいようにと、端の席に移動する。また、別の折には、ウェントワースに聞かれていることを十分意識した上で、エリオット氏が参加する自宅でのパーティーよりも、ウェントワースを含め、マスグローブ家が行こうとしている芝居の方に行きたいと断言する。極めつけは、ハーヴィル大佐との会話である。妹のファニーが亡くなったばかりなのに、婚約者であったベニック大佐が早くもルイーザと恋仲になってしまったことを嘆く大佐に対し、アンは、一般論に自分の感情を重ね合わせてこう表現する。

> 女性はそんなに簡単に男性を忘れることはできません。男性がすぐに女性を忘れるようにはね。それは女性の長所ではなくて、女性の運命なのだと思います。そうするよりほかにないのです。女性はいつも家にいて、狭い世界で静かに暮らしていますから、どうしても感情の虜になってしまうのです。(385)

ウェントワースが話を聞いているとは思わなかったが、聞き取れる可能性も十分ある距離でアンは更に続ける。

> でも私が言いたいのは、女性だけに与えられた特権があるということです。（それほど羨ましい特権ではありませんし、男性がほしがる必要はありませんが）その特権とはつまり、女性は愛する男性と死に別れても、愛し合える希望がなくなっても、その男性をいつまでも愛し続けることができるということです（390）

ウェントワースが、聞いていてもいなくても、アンは発言を止めなかったであろう。なぜなら、結ばれる可能性がなくなっても、一人の男性、すなわちウェントワースを愛し続けるという、女性の強い愛情は、アンの生きざまそのものだからである。

アンのこうした熱弁は、実はウェントワースの耳に入っており、彼は別れ際に彼女に変わらぬ愛を告白した手紙を手渡す。やがて、二人きりになれたアンとウェントワースは、愛を誓い合い、結婚の約束をするのであった。この場面はウェントワースの語りが中心的である。オースティンは、戦争など直接体験したことがない事項については、小説で書かなかった。そこで読者が今までのところ男性であるウェントワースの心境の変化を垣間見ることが出来たのは、アンと同様で、傍観者としてのみであった。この場面のウェントワースの語りは、彼自身が初めて明かす心の声であり、読者はこの語りを聞きながら今までの彼の言動を振り返って納得することができるという仕掛けになっている。長い語りなので、本稿の第二章で述べた誤解がどのようにウェントワースの中で解消していったかが、窺がえる発言を取り上げたい。

> ぼくはあなたの美点を認めようとしませんでしたが、それはあなたの美点がぼくを苦しめたからです。ぼくはいまあなたを、心のつよさとやさしさをみごとに兼ね備えたすばらしい女性だと確信しています。(略)あのライムの事故でぼくは学んだのです。断固たる心の強さと、片意地な強情さとの違いを。そして、向こう見ずな大胆さと、冷静な決断力との違いを。ぼくはライムで、自分が失った女性のすばらしさをあらためて思い知らされたんです。(401－2)

アンが女性の変わらない愛情についての熱弁を振るう前、ウェントワースは「結婚できるだけの収入の当てがないのに婚約するのは、とても危険で愚かなことだと思いますし、そういう婚約はご両親がとめるべき」等のマスグローブ夫人とクロフト夫人の会話を聞いていた。アンの持つ〈断固たる心の強さ〉と〈冷静な決断力〉のすばらしさを理解したウェントワースにとって、当時のラッセル夫人の反対が、アンにとっては母親代わりのラッセル夫人の立場からしては究極に的外れな反応ではなかったのだと、ウェントワースは理解したに違いない。

その夜自宅のパーティーで、ウェントワースに再び会ったアンは言う。

> 私、過去のことを考えていたんです。正しかったか間違っていたか、公平に判断しようと思って。もちろん私自身のことですけど。それで結局、私は正しかったと思っています。(略)あのときの私にとって、ラッセル夫人は文字どおり母親代わりだったのです。でも誤解しないでください。彼女の忠告が完全に正しかったと言っているわけではありません。(略)いまの私が同じような状況に置かれたら、私は絶対にあのような忠告はいたしません。でもやはり、ラッセル夫人の忠告に従ったのは正しかったと思っています。もしラッセル夫人の忠告に従わないで、あのまま婚約をつづけていたら、結婚をあきらめた場合よりももっとも苦しい思いをしたと思います。母親代わりのラッセル夫人の親切な忠告に逆らったという良心の呵責を感じて、思い悩むに決まっていますもの。(410－11)

これをきいたウェントワースは、「ラッセル夫人よりも大きな敵」(411)は、実は彼自身のプライドであり、財産を作った6年前にもう一度、アンにプロポーズしなかったことを反省するのであった。

6．おわりに

この小説を読んだ後、『説得』というタイトルでまず思いつくのは、婚約解消をもたらしたあのラッセル夫人の〈説得〉である。その他にも、登場人物の中で繰り広げられる日常の些細なことから、重要な決定に関する〈説得〉が、この小説には満載である。しかし、文章でこそ書かれてはいないが、この小説でなされた一番重要な〈説得〉とは、アンとウェントワースが、それぞれ自己で行った自分自身への〈説得〉ではないかと思う。第二章冒頭で挙げた、(persuade)の定義の、「(reasoning)を通して」という部分に注目するならば、アンの場合では、正しい説得だったかどうかは別としても、親代わりのラッセル夫人の説得を受け入れたことと自体の正当性を自分自身で納得したことを指すであろう。またウェントワースの場合は、ライムの事件を通して、アンという女性のすばらしさを理解したことを指すであろう。面白いことに、小説の中でこうして本来結ばれるべき二人が〈自己への説得〉の末、誤解を解き、弱点を克服して第二の春を迎える過程が、二人が結婚する意義を我々読者に〈説得〉するという二重構造になっている。

二人が結ばれるときには、アンは28歳でウェントワースは31歳。当時としては所謂「晩婚」カップルと言ってよいであろう。人生の辛苦を味わった「成熟した知性」(413)の持ち主である二人が勝ち取った幸せの物語は、経験を積んだ作家の成熟した小説として今も読み継がれており、地味ながら深い愛情と芯の強さを持ったアン・エリオットは、ロレンス・ラーナーを含め多くの批評家が指摘するように「ジェイン・オースティンの女主人公中もっとも愛される人物」[14]にちがいない。また女性の高学歴化と社会進出が進む現代では、都市化や晩婚化から、満たされることのない恋愛生活に孤独感を感じる女性が増えている。結婚適齢期を過ぎても愛する男性を一途に思い、愛を勝ち取るアンの姿に励まされる女性読者も多いかもしれない。愛を語る手段は手紙から電子メールに、おとなしく控えめと思われてきた女性たちは〈肉食系女子〉と呼ばれる積極的な女性たちへと変貌した今日でも、オースティン小説の登場人物たちが模索する愛と分別のある結婚の物語は、今後も老若男女に読み継がれていくであろう。

脚注・参考文献

1） Jane Austen, *Persuasion*. 1818. (Oxford: OUP, 1985)
以降本稿本文中の引用においては、中野康司訳『説得』（2008、ちくま文庫）を利用した。引用末に記載のページ数もこの訳本に順ずる。

2） Ibid., *Pride and Prejudice*. 1813. (Oxford: OUP, 1998)

3） Ibid., *Emma*. 1815. (Oxford: OUP, 2008)

4） Walton Lits, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development* (London: OUP, 1965) 154.

5） *Oxford Dictionary of English: Second edition* (London: OUP, 2003)

6） John Hardy, *Jane Austen's Heroines* (London, Boston, Melbourne and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1984) 112.

7） Jane Austen, *Mansfield Park*. 1814. (Oxford: OUP, 2008)

8） Ibid, *Northanger Abbey*. 1818. (London: Penguin Classics, 2003)

9） John Wiltshire, “Mansfield Park, Emma, Persuasion”, Chapter 4 of *The Cambridge Companion to Jane Austen* (Cambridge: CUP, 1997) 79.

10） Mona Scheuermann, *Reading Jane Austen* (London: Palgrave Macmillan, 2009) 158.

11） Malcolm Bradbury, *Essays in Criticism XVIII(4)* (Oxford: OUP, 1968) 383-396.

12） 新井潤美編訳：ジェイン・オースティンの手紙．p. 401，岩波文庫．東京，2004

13） 鶴見八重子、他編：イギリス小説の女性たち． pp. 44-45 （植松みどり「第１章静かなる情熱の女――J.オースティン『説得』――」），勁草書房．東京，1983

14） 蛭川久康著訳：講座・イギリス文学作品論・３ ジェイン・オースティン．p. 161 (Laurence Lerner, *Persuasion*)，英潮社．東京，1977

Notes on Jane Austen's *Persuasion* (1818): The Ultimate Act of Persuasion

Suzuko Brown-Mamoto

<Abstract>

Persuasion (1818) is Jane Austen's last complete novel. Its protagonist, Anne Elliot is generally thought to be a character who does not learn to alter very much in contrast to the other protagonists of Austen's novels. In opposition to this view, this paper will demonstrate Anne's self-growth. As the story progresses, Anne realizes that she was right in taking Lady Russell's advice on canceling her engagement with Captain Wentworth. In fact, this realization gives the novel its title. This paper will explore the processes of understanding past and present situations of Anne and Captain Wentworth respectively. In short, the ultimate persuasion for Anne is to believe the correctness of her past action. As for Captain Wentworth, it is to understand the real character of Anne.

Key words: Jane Austen, Persuasion, Anne Elliot, self-growth, British Literature

Instructor in the Department of English, Faculty of Humanities, Seinan Jo Gakuin Uninersity